

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ福岡12書き下ろし

作・庵字

八百墓村

私の名前は寺畑和弥。盛三夜子という女性に連れられ、故郷の八百墓村にやってきたところ、訝えないスタイルの危ない——いや、怪しいおっさんと出会った。「寺畑一弥くんですね」おっさんは、もじゃもじゃの頭髪を手で掻き回しながら、「僕、こういうものです」と名刺を差し出してきた。

〈落し 鈴田一耕〉

「えっ？ 探偵の金田一って、あの有名な？」

「いやいや、違うんですな。よく見てください。名前の三文字目の横棒は、『一』じゃなくて、長音なんですな」

「長音って……。あ、ということは『きんだいち』じゃなくて『きんだー』？」

「そうです、そうです、そうなんです。僕、金田一耕助といいます。名刺は横書きなので誤魔化せますが、この小説は縦書きだから一発でばれちゃいますからね。地の文で虚偽の記述をするわけにはいかないでしょう。あつはつは……」

「でも、この小説は私の一人称ですから、私が勘違いしたままであれば『金田一』で押し通せたのでは？」

「あ、これは一本取られましたな。じゃあ、僕は『金田一耕助』ということで」

「もう遅いですよ。で、そのニセ金田一が、私になんの用ですか？」

「和弥くん、君、この村名の由来をご存じですか？」

「いえ。八百の墓の村、だなんて、不穏な名前だなと気になってはいましたが」

「はるか戦国時代、この村に八百人の落ち武者たちが逃げ延びてきたんです」

「八百人！ 目立ったでしょう。よく逃げ延びられましたね」

「その落ち武者たちは財宝を隠し持っていたんです。それを知った村人たちは、その財宝を横取りしようと、落ち武者たちを皆殺しにしてみました」

「八百人もの武者を相手によく勝てましたね。村人なんて百人もいないでしょう」

「村の講堂に落ち武者たちをおびき寄せ、床を抜いて一網打尽にしたそうです」

「ルルーシユがよく使う手！」

「落ち武者の大将は、呪いの言葉を残して死に、祟りを恐れた村人は、落ち武者の人数と同じ八百の墓を建立し、八墓明神として落ち武者たちを祀りました」

「大変な作業だったでしょうね。それがこの村名の由来というわけですか」

「で、その祟りなのでしょうかね、今から二十六年前、村の資産家である田地味家の当主、YOH蔵が突如村人たちを襲いまくるという大惨事が起きてしまったのです。その被害者数なんと、実に三十二名！」

「八百人を一網打尽にした話を聞いたあとだと、スケールが小さく感じますね」私が言った横で、三夜子さんが、

「そんな話より、早く田地味家へ行きましょう、和弥さん」

それもそうですな、と私たち三人が歩き出そうとしたところに、

「お前は村から出て行け！ でなければ、八百墓明神の祟りが来るぞ！」

いきなり怒声を浴びせられた。声の主は、みずばらしい格好をした女性だった。三夜子さんは、女性を無視して私と金田一を連れて歩き出す。

「今の人は、マテ茶の尼と呼ばれています。二十六年前の事件で夫と娘を失って以来、あのようになってしまったそうです。盗癖があるので気をつけてください」田地味家に辿り着き、私たちは奥の間へ通された。そこに待ち受けていたのは、同じ顔をした二人の白髪の老婆だった。そのひとりに三夜子が、

「和弥さんをお連れしましたよ、弧梅さん」

「わしは弧竹じゃ。わしらのことを間違えるのは、村ではお前くらいのものじゃすみません、と平謝りする三夜子さんと金田一に席を外させると、二人の老婆は、私を呼び寄せたのは自分たちだと明かした。その目的は、田地味家の家督を私に継がせることにあるのだという。」

「ちょっと待ってください。私がこの家の跡継ぎということは……」

「そうじゃ。二十六年前の大量殺人事件の犯人、YOH蔵はお前の父じゃ」

それから食事を摂って床についた私だが、自分の中に三十二人もの人間を殺した男の血が流れているのかと、そら恐ろしくなったが、そもそもこの村民は、八百人を殺した人間の末裔だしな、と考えたら、どうってことないなと思えた。

そんな中、連続殺人事件が起きた。僧侶、医者、漫才師、ユーチューバー、という、村に二人しかいない、対になる片方が殺されるという奇妙な事件で、現場には二人の名が書かれた紙が残され、殺された方の名に線が引いてあった。

表情を変えない三夜子を前に、金田一の推理は続く。

「自殺に見せかけたのは、事件の罪を着せるためです。現場にあった弧梅さんの名前が書かれた紙が証拠です。どうして犯人はあれを弧梅さんの現場に置いていなかったのか、それは、殺した相手が弧梅さんか弧竹さんか区別をつけられなかったからです。そこで犯人は、紙のことは一旦保留にして、警察の調査で死体が弧梅と弧竹のどちらなのか判明するのを待ったというわけです。この村である二人の老婆の見分けをつけられないのは、あなたただでさうですからね」

「……どうして、マテ茶の尼が盗んだ鞆が私のものだと言い切れるんですか」
「この村の人たちはね、もうマテ茶の尼の盗癖を知り尽くしているから、ばっちり防犯対策をしているんですよ。この村のほとんどの世帯がセ〇ムかA L S〇Kに加入しています。この村でマテ茶の尼に隙を見せてしまうのは、よそ者か、長いこと村から離れていた人くらいです。あの鞆はレディースなので、和弥くんの持ち物でないことは明らかですからね」

金田一の推理を突きつけられ、三夜子は自白した。なんと、三夜子はこの村の住人に殺された落ち武者大将の末裔で、自分の体にはその武者の靈魂が宿っているのだと言い張り、復讐のため村人を皆殺しにするつもりだったというのだ。マテ茶の尼を犯人に仕立て上げたのは、これで事件は終わった、と皆を油断させるためだったという。ということは、彼女の復讐対象には私も入っていたということだ……。連行されていく三夜子の小さな背中を、私は複雑な想いで見送った。さらにその翌日、もうひとつの事件が発覚した。なんと、村の外れにあるお堂の中で、監禁されている本物の金田一耕助が見つかったというのだ。犯人は間違いない金田一だ。私がそのことを問い詰めると、

「いや、しかしですね、私は金田一さんの命を救ったともいえるんですよ。なぜって、ほら、もし金田一さんが村に来てしまったら、〈探偵〉が二人になって、村で対の存在になってしまい、彼か私のどちらかが三夜子さんの殺害対象になっていたかもしれないじゃありませんか」

「そもそも、あなたが来なければよかっただけなのでは？」

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」K―41―42に、ぜひまたお越しください！

(了)

この一連の事件に怪気炎を上げたのはマテ茶の尼だった。

「八百墓明神の祟りじゃ！ 明神と同じ人数が死ぬまで祟りは続くぞ！」

村人全滅するだろ。そうして次に「祟り」の犠牲になったのは、なんと弧梅刀自だった。しかし、その現場には、例の対になる二人の名が書かれた紙は残されていないかったのだ。警察は、犯人が忘れただけなのでは、と考えているようだが。

私は事件の合間に、三夜子さんと話をする機会を持てた。てっきり彼女は八百墓村に在住していると思っていたのだが、さにあらず、彼女は高校進学と同時に村を出て、以降はずっと都会、しかも私と同じ街で暮らしているのだという。そうであれば、私を村へ連れてくる役割としてうってつけだったというわけだ。

「何十年かぶりに村へ帰ってきましたけれど……変わっていませんね」

「変わらない……八百墓村が、ですか？」

「ええ。子供の頃は、こんな何もない、文明に取り残されたような村、すぐにでも出て行きたいとばかり思っていたのですけれど……こうして何年も変わっていない景色を見ていると……妙に懐かしい気持ちになってきます……」

そう言うて寂しげに微笑んだ三夜子の横顔を、私は黙って見つめていた。

次なる事件が起きたのは、その翌日だった。マテ茶の尼の首吊り死体が自宅で見えられたのだ。傍らには、村にもうひとりいる尼とマテ茶の尼の名が書かれた紙が置かれており、当然のように線が引かれているのはマテ茶の尼のほうだった。しかも、発見された紙片はそれだけではなかった、先の現場には残されていなかった〈弧梅、弧竹〉の紙もあったのだ。こちらも当然、殺された弧梅に線が引かれていた。一連の事件の犯人は、マテ茶の尼で、これは覚悟の自殺ということなのか？ 紙も、名前を書くのに使われたインクも、これまで発見されたものと同じ材質で、偽物ということは考えがたかった。

「犯人は、三夜子さん、あなたですね」

翌日、関係者たちを集めた席上で、金田一は言い放った。

「あなたは、弧梅さんを殺害した直後、マテ茶の尼に鞆を盗まれてしまいました。鞆の中には、これから殺そうとする標的の名前を書いた紙が入っていた。何としても取り戻さないとけません。そこであなたは、マテ茶の尼の家に忍び込み、鞆を回収するとともに、ついでにマテ茶の尼を自殺に見せかけて殺したのです」